第五回 アジ研図書館利用者〝一愛好者のつぶやき〟

保科 秀明

日頃よりアジア経済研究所・付属図書館を利用しています。

私自身今はすでに退職しましたが、かつてはJICAの国際協力専門員として長く勤務していたこともあり、現役時代は開発途上国問題にどっぷりと浸っていました。しかし退職後は、時間が自由になった割には途上国問題に触れる機会は激減し、ほかに趣味もないので暇を持て余していました。そんな時にアジ研の図書館に出会ったのです。

アジ研は昔、東京・市ヶ谷にありましたが、現在はJR京葉線「海浜幕張」にあります。そこは住まいから近いこともあって、自転車に乗って通い始めました。

はじめのころは取り留めもなくアジアやアフリカの図書に触れていましたが、ふと在職中に書き留めていた備忘録があったことに思い当たりました。その備忘録は単なる書き散らかしでしたが、アジ研図書館に収納されている膨大な資料を見ているうちに、これらの資料の助けを借りて〝何かシナリオ作りにつながらないか〟と考えるようになりました。それからいっそう熱心に通うようになりました。

アジ研図書館には開発途上国を中心に国別資料や時系列資料が蓄積されています。同時に途上国に関する最新の出版物や国際機関統計などもそろっています。また専門領域も多様で、政治、経済、地理はもとより、ビジネス業界や貧困問題、WID、開発と子供、安全保障といった、ほぼありとあらゆる分野がカバーされているといっていいでしょう。

現場から離れた私にとって、毎月追加される最近の出版物にも触れられることは大きな刺激になりました。

私の関心領域は開発途上国の都市問題です。政治、経済、農業といったほかの専門分野から見ると、都市問題というのは研究領域として確固たる分野を示しているとは言い難い、何かヌエ的な領域にも思えます。あえていえば、〝国家か都市か〟という対比のほうがわかりやすいのではないかとも思っています。今風にいえば地方自治の問題と重なります。日本では幕藩体制の時から幕府のもとで、各藩はかなり主体的な藩の運営を任されていたようです。

一方、開発途上国では大半が植民地行政のもと、地方自治といった体制は整っていなかったのではないでしょうか。そんななかで都市問題に取り組む事は容易なことではありません。したがって、取っ掛かりは大都市問題でした。かつて途上国の大都市問題といえば、各国の首都問題だったといえます。国家にとって首都はその顔であり、外国大使館の置かれるところであり、中央官庁の集積地でした。途上国の都市問題は首都問題から出発したといっても過言ではありません。アジア諸国では政治の安定を背景に、首都部で盛んな企業活動が起こり、それに伴い人口が集中し始め、都市の交通問題が深刻化しました。これに伴って、郊外の農村地帯に市街地が広がり、住宅や工場、また大型のショッピング・センターなどが建設されていきました。

このような、いわば〝近代化〟が進むなかで、一九七〇年代後半から九〇年代まで、取り残されたスラムやスクヲッターと呼ばれる劣悪な居住地区問題が社会問題として取り上げられました。特に国連や国際機関の大きな関心を引き付けたのです。しかしなぜか二〇〇〇年代、脱冷戦時代に入るとその熱が急速に引き始めます。地球環境問題は引き続き関心を持たれていますが、それは経済先進国・途上国に限らず共通の問題であり地球的な課題だという認識が広がったからです。その陰で、スラム・スクヲッター問題はそれぞれの地域の問題であるとして、わきに追いやられてしまった感があります。

しかし、アジ研図書館に収集される図書の中にはこれに関連した出版物が営々と収集されています。ただし、出版物の著者の関心は〝貧困〟、〝格差〟、〝女性〟、〝子供〟といった着眼点に代わってきているようです。

いずれにしても、開発問題の在り様は〝都市〟か〝農村〟か、という視点からまさに〝グローバル〟な視点に移ってきているようにも見えます。

こんな仮説が妥当であるかどうかはわかりませんが、今後も折を見てアジ研図書館に通いながら、自己検証に努めたいと思います。

（ほしな　ひであき／開発問題研究者）